

宮の前遺跡出土の縄文土器

吉 岡 弘 樹

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1 はじめに | 3 出土した土器類 |
| 2 宮の前遺跡と周辺の縄文時代遺跡 | 4 おわりに |

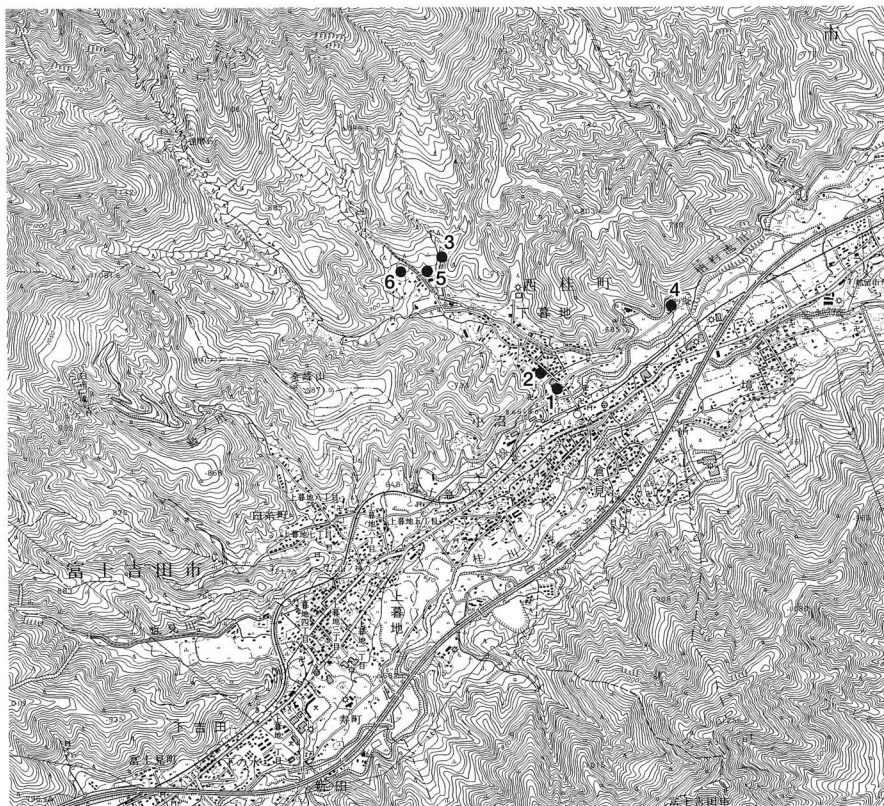
1 はじめに

宮の前遺跡の占地する桂川流域には多くの縄文時代後期を主とした遺跡が点在することが知られており、これが郡内地域の遺跡分布の特色とされている。ここでは、今まで報告がなされていなかった平成 14 年度(2002 年)1 月 17 日と 18 の両日にかけて桂川流域下水道発信基地建設事業に伴って実施された試掘調査によって出土した資料を紹介するものである。

2 宮の前遺跡と周辺の縄文時代遺跡

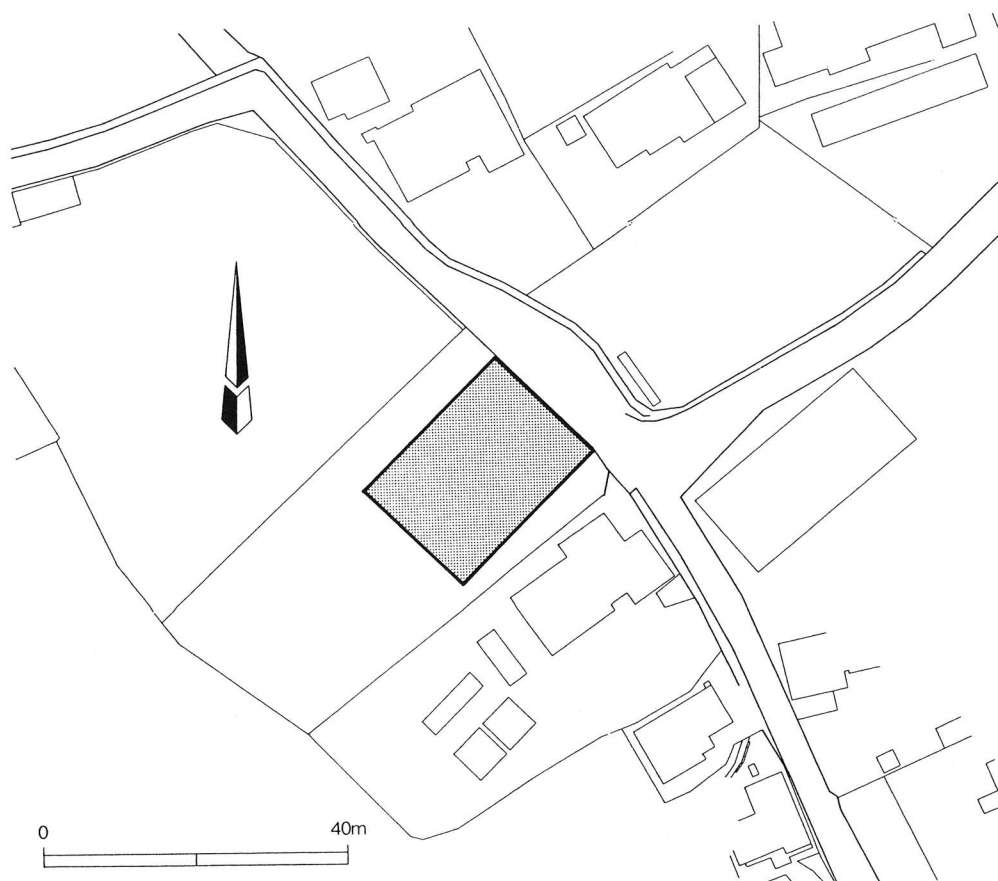
縄文時代の富士山は新富士火山期のⅠ期(10,000～3,200 年前)とⅡ期(3,200 年前～西暦 1,707 年の宝永大噴火)の範疇に含まれることになる。Ⅰ期は縄文海進があった時期で富士山では猿橋溶岩流(約 8,500 年前)や桂溶岩流(約 8,500～7,700 年前)の大規模な溶岩流の流出や小規模なテフラの噴出がみられている。しかしながら、気候の温暖化もあり、富士北麓地域でも遺跡が増加する傾向がみられる時期である。Ⅱ期は縄文時代後期の大爆発や気候の悪化、小海退が起こり間氷期から氷期への移行が感じられる時期にあたる。

宮の前遺跡の周辺においては、西桂町で確認されている最古の縄文土器として早期初頭の燃糸文系土器が出土した寺野遺跡③が知られている。縄文時代中期になると全国各地で遺跡の急増し尚かつ大型化するようになる。柄杓流川と一石川の合流地点には中期中葉の藤内式土器や配石遺構が確認されている下尾尻遺跡④がある。しかし、代表的な遺跡としては当調査地点も含まれる宮の前遺跡①・②が上げられよう。寺野遺跡の下方約 300m、標高約 660～700m に立地するのが昭和 54・55 年(1979・1980 年)に町誌編纂事業によって発掘調査された城屋敷遺跡⑤である。当遺跡からは土坑 1 基と小竪穴状遺構 5 基などが検出され、特に小竪穴状遺構からは、晩期前半の

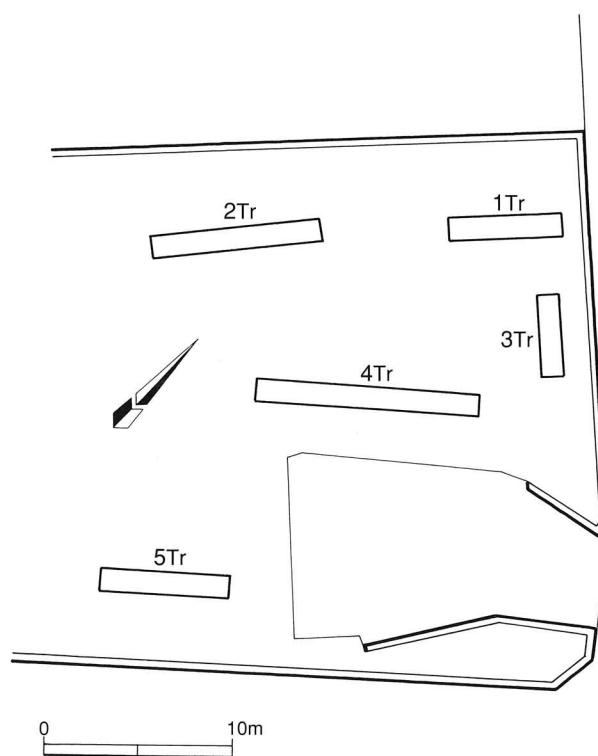


第 1 図 宮の前遺跡と周辺の縄文遺跡位置図 (S = 1/25,000)

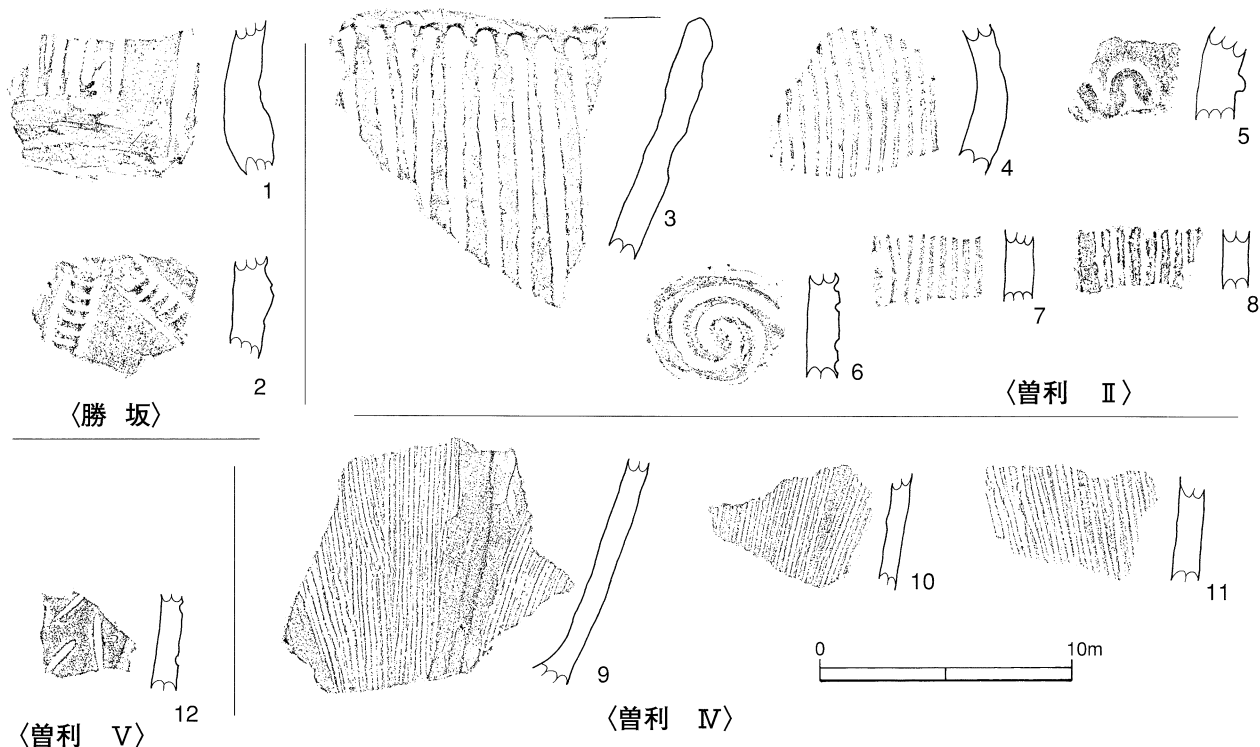
1 宮の前 遺跡	平成 13 年度発掘調査地点 平成 14 年度試掘調査・平成 15 年度発掘調査地点		
2 宮の前 遺跡	昭和 62 年度発掘調査地点		
3 寺野 遺跡	4 下尾尻 遺跡	5 城屋敷 遺跡	6 休場 遺跡



第2図 調査地位置図 (S = 1/1,000)



第3図 トレンチ開口位置図 (S = 1/400)



第4図 出土遺物 その1 (S = 1/30)

清水天王山式土器が多量に出土している。また、北方より連なる石組み遺構の存在も知られている。この城屋敷遺跡の西方約200m、標高約730～750mに休場遺跡⑥が占地している。西桂町誌によると大正末期に縄文時代前・晩期の土器片や石匙の出土したとの記述がみられる。

宮の前遺跡は昭和62年(1987年)7月から約1ヶ月13㎡を西桂町教育委員会が発掘調査し縄文時代中期後葉曽利Ⅱ～Ⅳ式期の竪穴式住居4軒と同末葉の敷石住居跡が検出されたほか、イノシシのモチーフがブリッジに施された釣手土器や器高約70cmの大型埋甕が出土したことで全国的に有名となった。続いて、平成13年(2001年)にも、工場建設に伴って調査がなされ、敷石住居跡や溝状遺構などを検出させている。平成14年(2002年)1月には、今回、紹介する桂川流域下水道下暮地発進基地建設による試掘調査が実施され対象地625㎡に対して5条のトレンチ(対象地の約7.3%にあたる45.5㎡)が開口され、地表下約40～60cmにおいて縄文時代後期の大型土器片が確認されたのである。その後、同年5月に本調査が行われ柄鏡型敷石住居跡1軒、配石遺構1基、土坑6基のほか2基の埋設土器が検出されている。

3 出土した土器類

今回、出土した土器類は縄文時代中期から後期初頭にかけてのものであり、図示し得る資料のみを掲載することとした。

1は縦方向の沈線を、2は連続爪形文を有し、ともに勝坂式期に比定できるものである。3～8は中期後半の曽利

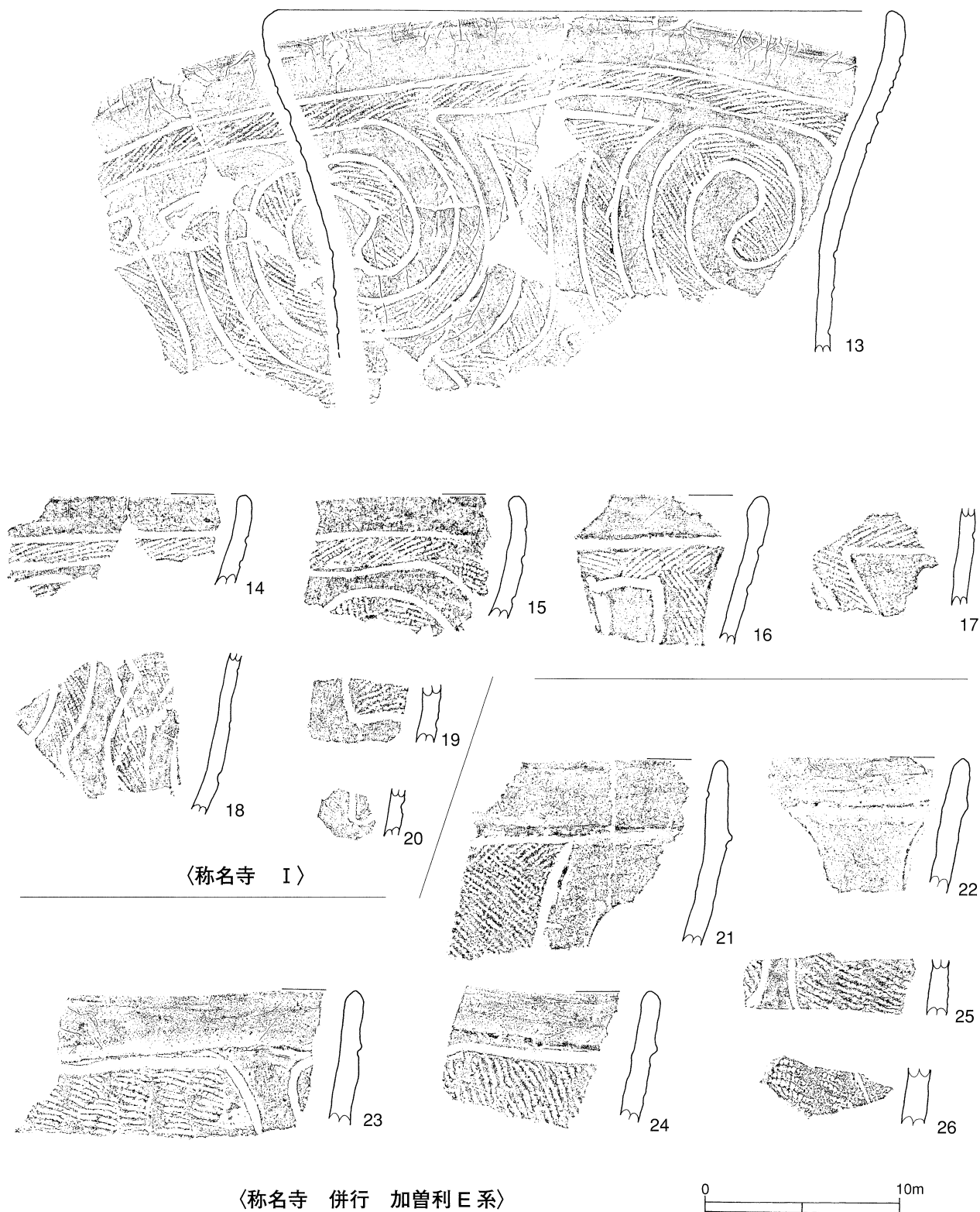
Ⅱ式期にあたる。3・4には、縦位沈線が施文されている。5は粘土貼り付けの波状文が、6には渦巻状の沈線が施されている。7・8には縦位の沈線が施文されている。9～11は曽利Ⅳ式期に比定でき、ともに縦方向の条線が観察できる。12は曽利Ⅴ式期でハ字文が施されている。13～20は後期初頭の称名寺Ⅰ式期である。13は口縁部から胴部上半までの大型破片で太い沈線で区画されたJ字文を基調としたモチーフ内に細かい縄文を施文している。14～20についても沈線の区画内に縄文を施すものである。21～26は称名寺式期並行の加曽利Ⅴ式系の土器である。

21～24には微隆起線文が横走しその下方に太い沈線によって区画された中に縄文が施されている。25・26についても21～24と同様に沈線によって区画された中に縄文を持つ構成となっている。

また、図示し得ないが縄文時代中期の浅鉢小破片も2片検出されていることを付け加えておく。

4 おわりに

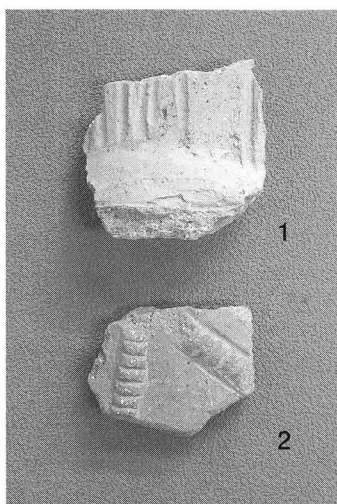
今回は平成15年度(2003年)5月10日から6月17日にかけての20日間の発掘調査が実施される根拠となった試掘調査の資料が未報告であったため簡単ではあるが資料報告として紹介した。当該地は南方に富士山、西方に三ツ峠が聳えており、縄文時代に限らず旧石器時代から近世までの遺跡が多く確認されている場所である。また、相模湖より相模川と名前を変え相模湾に注ぐ桂川流域には宮の前遺跡の盛行したと考えられる縄文時代中期後半から後期と同時期に存在した大環状配石遺構が確認された都留市牛石遺



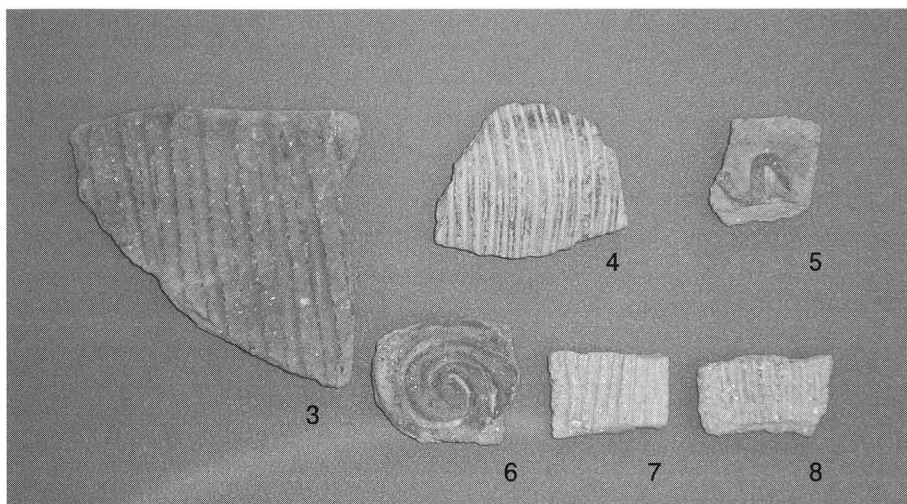
第5図 出土遺物 その2 (S = 1/30)

跡や中谷遺跡、大月市大月遺跡・塩瀬下原遺跡など多くの注目された遺跡が確認されてきている。今回紹介した資料も県東部地域の研究に対して大きな役割を持つものであり、これらの研究に今後の期待が待たれるところである。

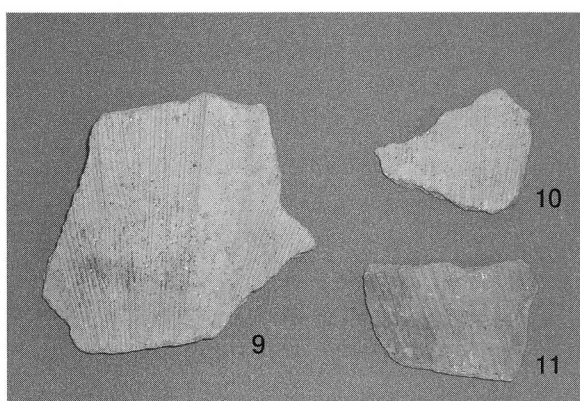
なお、本紹介をまとめるにあたっては、坂本美夫氏、三田村美彦氏に御教示を賜った。記して謝意を表したい。



勝坂式期



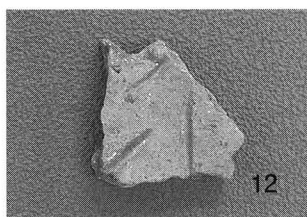
曾利Ⅱ式期



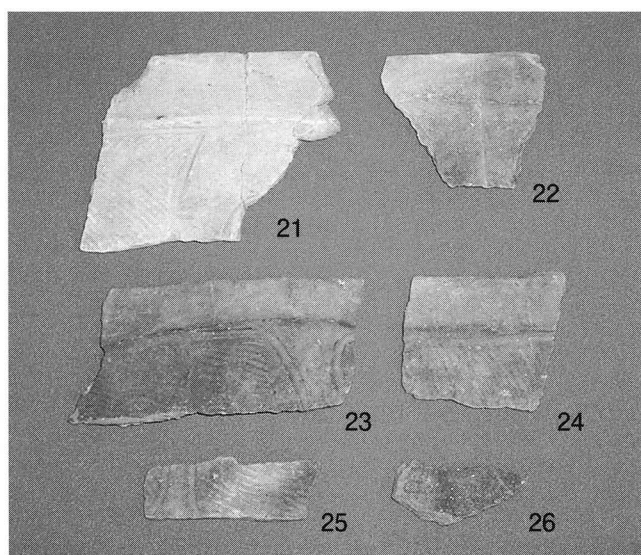
曾利Ⅳ式期



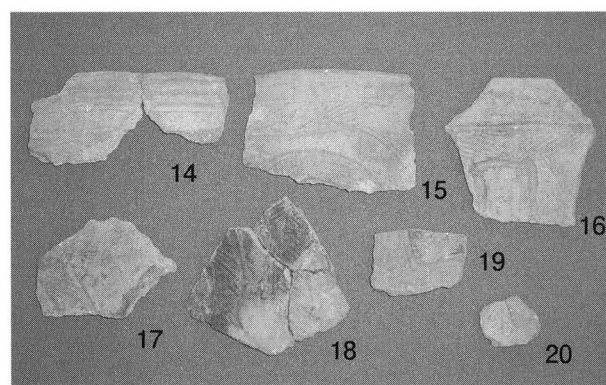
称名寺Ⅰ式期 その1



曾利Ⅴ式期



称名寺式期併行加曾利Ⅴ式系



称名寺Ⅰ式期 その2

宮の前遺跡 出土土器一覧表

No	出土トレンチ	器種	部位	時期	注記表示
1	2Tr	深鉢	胴部下半	勝坂	02 宮試 2Tr
2	2Tr	深鉢	胴部	勝坂	02 宮試 2Tr
3	4Tr	深鉢	口縁部	曾利Ⅱ	02 宮試 4Tr
4	2Tr	深鉢	口縁部やや下	曾利Ⅱ	02 宮試 2Tr
5	2Tr	深鉢	胴部	曾利Ⅱ	02 宮試 2Tr
6	2Tr	深鉢	胴部	曾利Ⅱ	02 宮試 2Tr
7	2Tr	深鉢	胴部	曾利Ⅱ	02 宮試 2Tr
8	4Tr	深鉢	胴部	曾利Ⅱ	02 宮試 4Tr 包
9	4Tr	深鉢	胴部下半	曾利Ⅳ	02 宮試 4Tr 床
10	4Tr	深鉢	胴部	曾利Ⅳ	02 宮試 4Tr 床
11	2Tr	深鉢	胴部	曾利Ⅳ	02 宮試 2Tr
12	4Tr	深鉢	胴部	曾利Ⅴ	02 宮試 4Tr 包
13	5Tr	深鉢	口縁部～胴部上半	称名寺Ⅰ	02 宮試 5Tr 土
14	5Tr	深鉢	口縁部	称名寺Ⅰ	02 宮試 5Tr 土
15	5Tr	深鉢	口縁部	称名寺Ⅰ	02 宮試 5Tr 土
16	5Tr	深鉢	口縁部	称名寺Ⅰ	02 宮試 5Tr 包
17	5Tr	深鉢	胴部	称名寺Ⅰ	02 宮試 5Tr 土
18	5Tr	深鉢	胴部	称名寺Ⅰ	02 宮試 5Tr 土
19	4Tr	深鉢	胴部	称名寺Ⅰ	02 宮試 4Tr 床
20	3Tr	深鉢	胴部	称名寺Ⅰ	02 宮試 3Tr
21	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利 E 系	02 宮試 4Tr
22	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利 E 系	02 宮試 4Tr 床
23	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利 E 系	02 宮試 4Tr 包
24	4Tr	深鉢	口縁部	称名寺併行加曾利 E 系	02 宮試 4Tr 包
25	4Tr	深鉢	胴部	称名寺併行加曾利 E 系	02 宮試 4Tr 床
26	4Tr	深鉢	胴部	称名寺併行加曾利 E 系	02 宮試 4Tr

参考文献

- 西桂町 2000 『西桂町誌』資料編第一巻 西桂町誌編さん委員会
- 山梨県教育委員会 2002 『年報 18』 山梨県埋蔵文化財センター
- 山梨県教育委員会 2003 『年報 19』 山梨県埋蔵文化財センター
- 山梨県教育委員会 2003 『宮の前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 207 集